

# 大事な原点

熊谷 博子

東京新聞 夕刊コラム『放射線』（現・『紙つぶて』） 2007年1月22日

忘れられない強烈な原点がある。60年安保の時、私は小学校3年生だった。テレビをつけると「安保反対、岸倒せ！」のシュプレヒコールとともに、国会周辺の激しいデモとぶつかり合いの様子が、連日映し出されていた。子ども心にも、何かしなくてはいけない、と思ったらしい。私は学校から帰ると、ランドセルを放り投げ、銀行がおまけにくれた紙のランドセルを背負った。そして「アンボハンタイ、キシタオセ」と叫びながら、家の周りを一人でデモごっこをした。家族がそういう雰囲気だったわけではない。

その翌年、61年の運動会だ。保護者席を見ると、何とその岸信介さんが座っているではないか。私の一年下の安倍クンと新入生の安倍クン。孫が二人小学生になったので、おじいちゃんが観にきたのである。オー、新聞に載っていた風刺漫画そっくりの顔、と思った。

昼休みに、サインを求める子どもたちが殺到した。私も土でドロドロに汚れたプログラムを差し出し、裏にサインしてもらった。それは長い間、私が宝物を入れておく、高級クッキー缶の中にあった。

しかし、と高校生になってはたと気づいた。どうも私は首尾一貫していないじゃないか。子どもであってもあの時何かを感じて“倒せ”と叫んだ人のサインを、なぜ後生大事に持っているのかと。で、捨てた。

当時は自分でもよくわかっていなかったが、長いものにまかれてはいけないのだと、最近つくづく思う。次々と法律が通り、この国を覆い始めた妙なムード。「美しい国」という言葉のもと、このまま長いものにまかれ、戦争に突き進むのは断固ごめん。